

「愛しちゃったのよ」

2007. 2. 25

マルコによる福音書 8 : 31 ~ 9 : 1    hymn 66, 365, ⑤507

きょうの説教題を見て、あるいは聞いて、心の中で「ヤヤヤンヤン」と歌ってしまった方もあるかもしれません。私も歌ってしまいました。

私は今までに一度だけ、教会学校の教師をしたことがあります。牧師の家庭に生まれ育ちましたので、自分でも意外な気がするのですが、特に親から勧められたこともなく、教会学校に関わったのは自分が生徒だった中学生時代まででした。

大学に入って親元を離れてからは、あまり教会に行かない時期が続き、その後は大阪市此花区にある四貫島教会の仕事を手伝いながら、併設されていた保育園に勤めるようになりました。そこでは学童保育にも携わりました。しかし4年後にはその保育園を辞めることになり、行く場所がないので親に頼りました。

当時父親が牧師をしていた、神戸にある須磨教会の牧師館に住まわせてくれるように頼んだのです。許可してもらいましたが、条件が付きまして。同志社神学部の大学院に行って牧師になるということでした。結局、大学院に入学するまでの期間を須磨教会で過ごすことになりました。

その須磨教会で、初めて教会学校の教師になったのです。私が担当したのは小学校3・4年生でした。いい年をして親に食べさせてもらう生活へのうしろめたさもあって、何かで恩返しをしなければなどと思い、教会学校に関わることに気合いが入りました。新鮮な気持ちで取り組みましたし、自分には保育園や学童保育で培った経験と実績があるという、自負心も働きました。

目指したのは、とにかく楽しい分級でした。分級を盛り上げるというのが、私の目標でした。毎週日曜日には、準備をたっぷりとして分級に臨みました。工作やゲームをし、ビデオを見たり、お菓子を食べながらの雑談も楽しみました。3・4年生のクラスだけのオリジナルのバッジを作ったら、みんなが毎週どこかに付けてきてくれて、一体感も得られました。教会の近くには海岸がありましたので、海にもよく遊びに行きました。私自身も楽しい分級で、みんなどんどん仲良くなって、友達を誘ってくるようにもなりました。他の学年の子どもたちも、分級が終わると私たちの所に遊びに来ました。

そしてそれらが問題となりました。3・4年生のクラスだけ子どもが増えたこと、子どもたちが教会学校終了の時間になってもなかなか帰ろうとしないこと、他の学年の子どもが3・4年生のクラスに行きたがるのが問題にされました。

教会学校の教師会では「ずるい」と言われました。自分たちだけバッジを作るなんてずるい、自分たちだけビデオを見るなんてずるい、自分たちだけ楽しむなんてずるい、と言われました。

教師会では「まずい」とも言われました。海になんか遊びに行って事故でも起きたらまずい、子どもがなかなか帰ろうとしないのは親から苦情が来るかもしれないからまずい、他の学年の子どもたちとのバランスが取れないからまずい、と言われました。

私たちの分級だけ突出していたことが、あるいは、私だけが変わったことをしたのが批判されたのです。

役員会でも問題になりました。牧師の息子が礼拝に遅れて出席するのがけしからんというのです。しかし子どもたちが帰ってくれないのだから仕方ありません。さらに役員会は、牧師の息子の服装が礼拝に出る者の恰好ではないともいいました。しかし子どもと本気で遊ぼうと思ったら、きれいな服など着ていられませんし、本気で遊んだら土や水で汚れるのだから仕方ありません。

子どもたちが一刻も早く帰りたくなるような分級をして、整った服装で、子どもたちとは上辺だけのつきあいをするのがいいのだと言われているようでした。

そして決意しました。教会学校の教師はこの1年間で辞めよう、この教会から早く逃げ出そう、そのためには大学院の入試に合格して京都に行くしかない。そのおかげで勉強に励み、大学院に入学することができて牧師になれたのですから、須磨教会の教師会と役員会には感謝しなければならないのかもしれないかもしれません。

須磨教会の教会学校の4年生に、祥子ちゃんという女の子がいました。示偏に羊と書く祥という字に、子どもの子を付けて祥子ちゃんです。羊が示す子です。いい名前だと思っていました。

分級で、教会学校の夏のキャンプのお知らせの手紙を配った時、祥子ちゃんはがっかりした顔になりました。気になったので尋ねました。

「どないしたん？ 祥子ちゃん」。

「このキャンプの時な、うちみんなでハワイに行くことになってんねん。1週間やねん」

「うわぁ、そらええなあ。キャンプは残念やけど。まあ来年もキャンプはあるし、ええやんか。ハワイで楽しんできいな」。

「そやなぁ」と言いながら、祥子ちゃんは帰って行きました。

次の日曜日、祥子ちゃんはニコニコしながら私のところにやって来ました。

「滝口先生、私、教会学校のキャンプ行けるようになってん」。

「えっ！なんで？ おんなじ時にハワイちゃうんかいな？」

「うん、ハワイやで」。

「ほんならなんでキャンプ行けんの？」。

「家族はみんなハワイ行きやんねん。けど、私はキャンプ行くねん」。

「うそや～、何言うてんの？ そんなありえへんわ」。

「ほんまやって、私はキャンプ行きたいねんもん」。

「けど、どうすんねん。おとうさんもおかあさんも妹も弟も、みんなハワイ行くんやろ？ 祥子ちゃん1人でどうやって暮らすねん。キャンプは3日間でハワイは1週間やろ？ あとの4日間はどうすんねんな」。

「うん、おばあちゃんがうちに来てくれる」。

「けど信じられへんなあ。ハワイやでハワイ。ハワイいうたら飛行機に乗ってビューンと行くんやで。キャンプは電車に乗ってゴトゴト、山道歩いてテクテクや」。

「だって私、教会のキャンプ好きなんやもん」。

「けどハワイ行ったらリッチなホテル暮らしやのに、キャンプ行ったら虫のいっぱいいるバンガローやで」。

「ええねん。私、好きやから」。

「ハワイいうたら常夏の島やで。晴～れた空～、そ～よぐ風～や。けどキャンプいうたら茶色い木に茶色い地面やで。夏は一緒でも、こっちは湿気多いから汗ダラダラや」。

「もうええって。なんや滝口先生、さっきから聞いてたら、私をキャンプに行かせたないんか」。

「ううん、そんなことない。キャンプ行って！」。

「うん、キャンプ行くわ。私ほんまに好きやねん」。

「なんや、さっきから好き好きって。わかった。ほんまはボクのこと好きやから一緒にキャンプ行きたいんやろ？　すごいなあボクって。ハワイに勝った男や」。

「アホ～、そんなとちゃうわ。私が好きなんはイエス様や！　イエス様が好きやねん」

少し照れながらそう言うと、祥子ちゃんは部屋の出口に向かいました。出口の所で振り返って、祥子ちゃんが私に言いました。

「私はイエス様が好きやけどな、でもな、あなたも悪くないで。まっ、もうちょっとがんばりいや」。

私はその年限りで須磨教会を離れましたので、あとのことは間接的に聞いた話です。

祥子ちゃんは小学校6年生のクリスマスに、洗礼を受けたいと牧師に申し出ました。牧師がそのことを役員会に諮ったところ、「子どもの言うことだから信憑性がない」とか、「一時の気まぐれで言い出したに違いない」とか、「いい加減な気持ちに決まっている」という意見があったそうです。さすがはあの役員会です。

結局は、牧師がもう1度話し合って決心を確かめること、そしてその後の判断は牧師に委ねるということになりました。

祥子ちゃんはクリスマス礼拝での洗礼式の時に、たくさんの大人たちの前に出て、自らの信仰を自らの言葉で、しっかりと告白しました。

高校3年生になった祥子ちゃんに、学校の先生は京都大学・大阪大学合格間違いなしと太鼓判を押したそうです。しかし祥子ちゃんの選んだのは看護の道でした。看護師になって困っている人に手を差し延べたい、それが祥子ちゃんの希望でした。

やがて看護師になった祥子ちゃんは、海外青年協力隊に加わり、アジア・アフリカへ出かけて行き、看護の知識と経験を生かし、そして何よりも自分の信仰を、具体的に誰かの傍らに寄り添うことで表していきました。それは子どもの時からずっと変わらなかったこと、「イエス様が好きやねん」ということに違いありません。

示偏に羊の子と書く祥子ちゃん。神の小羊がそのことを示してくれました。

きょうの聖書箇所にはこうあります。「それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、3日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた」。

「長老、祭司長、律法学者」というのは、サンヘドリンというユダヤの議会の構成メンバーです。聖書では「最高法院」と訳されていて、法を扱って政治的な事柄を決定していく機関ということです。

イエスはその政治権力によって自分が殺されるということを明言したのです。

すると、それを聞いた弟子のペトロがイエスを「いさめ始めた」とあります。イエスが突拍子もないことを言い出したと受け止めたのでしょうか。自分の愛するイエスが死ぬなどということは受け入れられないと思ったのでしょうか。そんなバカなことがあるはずはないと考えたのでしょうか。

いずれにしてもペトロは、イエスの言葉を理解できなかったのであり、イエスと長い時間生活を共にしていながら、イエス自身を理解していなかったということでしょう。

そのペトロの行為に対して、「イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた」とあります。ペトロだけを叱ったわけではありません。「弟子たちを見ながら、ペトロを叱っ」たのです。すなわち他の弟子たちも一緒に、まとめて叱ったのです。それは、ペトロを含めて他の弟子たちも、イエスを理解していなかったということです。イエスの言葉を信じなかったし、イエスの思いの本当のところを受け入れられなかったということです。

そしてイエスは、「群衆を弟子たちと共に呼び寄せて」言っています。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」。

「従う」ということは、後について行く、同じ道を歩むということです。イエスの生き方の後について行く、イエスが歩んだのと同じ道を歩む、それがイエスに従うということです。そしてイエスに従うために必要なことが言われています。「自分を捨て、自分の十字架を背負って」ということです。

「自分の十字架を背負う」という表現は、イエスの時代の死刑の方法に由来しています。当時の死刑にはいくつかのやり方があったのですが、十字架刑が最も重い死刑の方法であるとされていました。

ユダヤにとって伝統的な死刑は石打ちの刑で、受刑者のまわりを取り囲んだ人々が、よってたかって石を投げ付けるのです。死ぬまで石を投げるわけですが、当たり所によっては早く死ぬる可能性があります。

十字架刑では、手足を十字架に釘で打ち付けられた後、脇腹を槍で刺されて、そのまま放っておかれるのです。死ぬまでずっと。出血多量や衰弱によって命が途絶えるまで、十字架の上に放置されます。

そしてその十字架刑を言い渡された受刑者は、自分がつけられる十字架の横木を処刑場まで背負って行くのです。処刑場には十字架の縦の木が突き立てられています。そこに横木を組み合わせることによって十字架となります。十字架につけられる者は、自分が殺されるための、しかもさらしものとなって傷つけられ放置されるための横木を、重い横木を背負って、処刑場までの道を歩かされるのです。

イエスも自分の十字架を背負って歩きました。弟子たちはそれを代わって背負おうとはしませんでした。それどころか、イエスが十字架を背負うその場にさえいませんでした。逃げ出してしまい、遠く離れた所にいたのです。弟子たちの背負わなかった十字架。それを背負ったのは、イエスに代わって背負わされたのは、イエスが歩む道の傍らにいたキレネ人シモンという見知らぬ男でした。

イエスは、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言います。

「自分を捨て」ということ。「捨てる」と訳されている聖書のギリシャ語は「アパルネイスタイ」という言葉です。これは「否と言う」とか「否認する」という意味を持つ言葉です。聖書の中では有名な場面でこの言葉が使われています。

サンヘドリン・最高法院でのイエスの裁判が始まると、ペトロは大祭司の中庭に出かけに行きます。そこでペトロは人々から、イエスの仲間ではないか、イエスと一緒にいたではないかと指摘されるのです。するとペトロはその指摘を否定して言います。「あなたがたの言っているそんな人は知らない」。ペトロはイエスを否定して、3度イエスを知らないと言います。この「知らない」と訳されている言葉が「アパルネイスタイ」です。きょうの箇所では「捨てる」と訳されている言葉と同じです。

ペトロはイエスを「知らない」と言った、すなわちイエスを「捨てた」のです。それはペトロが自分を捨てなかったということです。自分に否と言わなかった。自分だけを守ることを否認しなかった。自分かわいさのためにイエスを「知らない」と言って、イエスを「捨てた」のです。

「自分を捨てる」ということは、自分に否と言うことです。あるいは自分を否認することです。古い自分に否と言って別れを告げることです。古い自分を否認して新しくなることです。自分かわいさを捨てるのです。自己中心的な思いを捨てるのです。自分本位の生き方を捨てるのです。

自分が大切、自分が中心、自分のために、という生き方にいつまでもとどまっていないうことです。自分から抜け出て、他者に開かれたあり方に向かって、何度でも新しくなっていくということです。

それが「自分を捨てる」ということです。それがイエスに従う道なのです。

「自分の十字架を背負う」ということは、自ら重荷を引き受けるということです。自分のためにではなく、誰かのために何かのために、喜んで重荷を背負うことです。それはずしりときます。歩く速度は遅くなります。足はもつれるかもしれません。しかし、引き受けた重荷の分だけ、誰かが、何か、変えられていくはずで、一緒に歩いて行く仲間が増えるはずで、喜びが広がるはずで。

そして「自分を捨て、自分の十字架を背負って」イエスに従うことの基本は、「イエス様が好きやねん」ということです。

愛しちゃったのだから仕方ない、イエスの後について行こう、イエスと同じ道を歩いて行こう、ということ。愛しちゃったのだから仕方ないのです。そうせざるをえないのです。

イエスも私たちのことを、愛しちゃっているのだから仕方ないのです。きっと面倒をみてくれるはずで。

この後で歌う④507番は、『こどもさんびか』でおなじみの歌です。そこでは高らかにこう歌われています。

主に従うことは、なんとうれしいこと。

主に従うことは、なんというしあわせ。

主に従うことは、なんと心づよい。

祥子ちゃんは言いました。「私はイエス様が好きやけどな、でもな、あんたも悪くないで。まっ、もうちょっとがんばりいや」。

私たちももっとイエスを好きになって、イエスに従っていきたいと思うのです。

ボンヘッファーというドイツの牧師は、ナチスに抵抗したためにゲシュタポ拘置所から強制収容所に入れられ、1945年4月に処刑されました。彼は『キリストに従う』という著書の中に、次のような言葉を残しています。

「イエス・キリストの生涯は、この地上でまだ終わっていない。キリストはその生涯を、キリストに従う者たちの生活の中でさらに生きておられる」。

私たちの生活の中に、生き方の中に、イエスの生涯の続きを写し出したいと思うのです。